

彼女は須磨へ行ったか

辻 憲男（文学部教授）

『源氏物語』の須磨の巻、26歳の光源氏は、人が少なく、京都からそう遠くない須磨にひとり隠退した。家は海が見えて波の音が聞こえる山中だった。八月の十五夜には月をながめ、都の人々を思って涙した。翌年の春、激しい嵐で落雷し、高潮が押し寄せた…。千年前の物語の“主人公の家の跡”というのおかしな話だが、さてそんなところは今のどのあたりだろう。

源氏の須磨退去のモデルになった人物は少なくとも二人いる。一人は昔わび住まいをした在原行平（ありはらのゆきひら）。月見山の松風村雨堂の南が浜辺で、須磨びとの塩焼く煙が立ちのぼった。海藻を焼いて灰にし、水に溶かしてうわ澄みを煮つめて製塩するのである。小さな土ナベのユキヒラはこの人の名にちなむ。もう一人、作者が意識したのは、さきごろ政争に敗れて太宰府に流された源高明（みなもとのたかあきら）。須磨関跡の東の現光寺は、むしろこの人の旧跡だという（もと源光寺）。どちらにしても、源氏の住居はそれより上、今の離宮公園や須磨寺あたりの高台に想定されたことになる。

紫式部自身はどうやら須磨に行ったことがない。20歳年上の夫が九州まで往復したみやげ話に、あちこちの名所の地理を聞いたりしたのである。ところが結婚後2年で夫は他界した。宮づかえに出て、育児のかたわら書きあげたのが『源氏物語』である。モデル論議の一説に言う、光源氏という男は、愛情こまやかだった亡夫の人柄に一番近いものがある、と。さもあらんか。



離宮公園から須磨浦。松風・村雨は行平に愛されたという姉妹の名前。